

Wasada Ichi

植田市遺跡Ⅰ

七瀬川河川改修工事に

伴う発掘調査概報

1988

大分県教育委員会



植田市遺跡全景

例 言

1. 本書は、昭和62年度に発掘調査を実施した七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は以下の通りである。

調査委員	渡辺澄夫（別府大学教授） 賀川光夫（別府大学学長） 小田富士雄（北九州市立考古博物館館長） 中野幡能（別府大学教授） 豊田寛三（大分大学助教授） 西別府元日（大分大学助教授） 後藤昭六（県文化課長） 徳丸欽也（県文化課参事） 後藤宗俊（県文化課主幹）
調査主任	渋谷忠章（県文化課埋蔵文化財第二係長）
調 査 員	牧尾義則（同 第一係主任） 西 哲弘（同 主任） 村上久和（同 第二係主任） 吉田 寛（同 主事） 小柳和宏（同 主事） 後藤晃一（同 嘱託）
調査補助員	神田高士（奈良大学学生） 池辺千太郎（立正大学学生） 河野史郎（別府大学学生） 安藤栄治
作 業 員	中津留ヨネ子・小野富美子・吉野岩子・古後秀子・愛甲須磨子・関美恵子・ 関則子・安東政子・安東房子・甲斐千和子・谷口マツエ・安東孝子・佐藤千 代美・宮川千慧・秦吸子・水口久美子・小米良道子・松尾キミ子・和気昌 子・安東典子・谷口和代・柳井ゆき子・山口カヨ子・伊藤文子・多志賀志津 子・曾我部恵美子・甲斐弘子・池田滝子・加島洋子・秋吉貴子・後藤俊博・ 守田隆彦・後藤聡・河崎真也・大石幸男・野下和幸・宮下貴浩・白木守・橋 本一彦・安部厚志・吉田謙治

上記の他、都出比呂志氏（大阪大学助教授）、三辻利一氏（奈良教育大学教授）、佐藤興治氏・玉永光洋氏（大分市立歴史資料館）、菊田徹氏（臼杵市教育委員会）などの視察と助言を得た。

4. 本書の執筆は渋谷・西・吉田が分担し、編集は渋谷・吉田が行った。なおトレースには井口あけみ・清原史代の援助を得た。

目 次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	発掘調査の概要	4
	(1)調査の概要	4
	(2)江戸時代の遺構・遺物	8
	(3)中世の遺構・遺物	10
	(4)平安時代の遺構・遺物	17
	(5)古墳時代の遺構・遺物	18
	(6)弥生時代の遺構・遺物	23
IV	まとめと今後の課題	24

図 版 目 次

Fig. 1	埴田市遺跡周辺遺跡分布図	3
Fig. 2	周辺地形図	4
Fig. 3	遺構全体図（最終検出時）	5・6
Fig. 4	1号溝復元想定図	8
Fig. 5	1号溝実測図（部分）	8
Fig. 6	1号溝出土遺物	9
Fig. 7	中世館全体図	11・12
Fig. 8	一括土師器出土状況	13
Fig. 9	土師器実測図	14
Fig. 10	中世館周辺出土遺物	15
Fig. 11	中世館周辺の遺物の出土位置	16
Fig. 12	3号溝出土遺物	17
Fig. 13	3号溝実測図	17
Fig. 14	流路出土土器	21
Fig. 15	ミニチュア土器・紡垂車実測図	22
Fig. 16	埴田条里図	25

I はじめに

調査の経過 植田市遺跡は、大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川流域左岸の沖積地に位置する。この一帯は、植田条里遺跡として周知されているが、その範囲が広範に及ぶことから、今回の調査区を新たに植田市遺跡と命名した。

七瀬川は、江戸時代後期の『豊後国志』に「赤坂川」と呼ばれている。しかし現在は、赤坂川とはまったく呼ばれず、七瀬川で通用し、その由来は上流から一ノ瀬、鬼坊瀬など七つの瀬のあることによるといわれる。いくつものS字形に屈曲した河川であるが、この流域に面した台地上には、古墳時代から中世にいたる多くの遺跡をみることができる。

またこの一帯は、「和名抄」にみえる大分郡植田郷に属し、12世紀前半頃からは摂関家領荘園の植田荘となり、保元の乱以後は後白河天皇の後院領となり、その後は皇室御領として相伝される。

さて、遺跡の南側では、七瀬川が大きくS字状に屈曲している。このため昭和28年6月の大洪水では大きな被害を受け、その後も危険な状態が続いており、現在の河道では洪水の再発はまぬがれない地域である。

一方、七瀬川沿岸周辺は、大分県の新産業都市指定（昭和39年1月30日）に伴い、産業・経済発展の影響を強く受けている。特に、大規模住宅団地の開発や田畑の宅地化が急激に進行し、人口及び資産の増大が進んでいる。このため、これらの地域の安全性の向上をはかるため、「七瀬川市捷水路工事」の早期着工が、緊急かつ重要な課題となってきた。

こうしたことから、昭和62年3月に建設省大分工事事務所より、工事の実施設計について正式な説明と発掘調査の依頼があり、同年6月より工事の進捗状況に合わせて順次調査を実施することとなった。

七瀬川河川改修に伴う全体調査対象地は、工事計画に基づき、幅90m、延長685mの約61,650m²となる。このうち昭和62年度は、「七瀬川市捷水路工事」に伴い、橋梁となる「市道高瀬・市線」のうち、「印鑰橋新設工事」施工部分を中心にした約6,000m²の調査を実施対象とした。

調査は、4月から準備にかかり、現地での調査は5月となった。しかしこの時期は、すでに周辺の水田の田植えが行われ、また梅雨とも重なって調査地域がしばしば水没する状況であった。一雨降れば、水の汲み出しにほぼ一週間が費されるといったことが何度も何度もくり返され、当初の調査予定面積の $\frac{2}{3}$ に当たる約4,000m²の調査で、昭和62年度は終了した。

しかし調査の結果は、弥生時代から近世に至るまでの多くの遺構や遺物が検出され、大分平野の変遷を知りうる重要な遺跡となった。次年度以降の調査が大いに期待されるところである。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

植田市遺跡は、大分川の支流である七瀬川が形成する沖積低地上に位置する。七瀬川は湯布院盆地をとりまく火山群を水源とし、大分市宗方付近で本流の大分川と合流する。

植田地区周辺では、大分川下流域を生産基盤として、良好な遺跡が集中している。植田市遺跡と関連する遺跡を紹介する。

雄城台遺跡は、植田市遺跡の北方約1kmに位置する弥生時代終末前後の環溝集落である。環溝の調査および公表された資料は一部に留まるが、長径約200m、短径約120m、幅5mの環溝が台地上を囲繞している。大分市内における該期前後の集落遺跡の大部分は、台地上に位置しており、低地面に立地する植田市遺跡・賀来中学校遺跡等との関連が注目される。

七瀬川左岸の木ノ上から下芹にかけての丘陵上には、多数の古墳・横穴墓が分布している。御陵古墳は全長75mの前方後円墳で副葬品に三角板革綴短甲等が認められた。世利門古墳は直径18mの円墳で主体部は凝灰岩製の家形石棺である。下ヶ迫古墳は直径20mの円墳で主体部は凝灰岩製の箱式石棺である。副葬品には振文鏡等が出土している。以上の古墳の実年代は、いずれも5世紀中頃から後半代に比定できる。植田市遺跡の今回の調査では、流れ込みの状態ではあるが、Ⅰ型式の古式須恵器が検出されており、周辺の5世紀代の古墳との関連が注目される。

続いて、6世紀後半から7世紀前半前後になると、七瀬川左岸の木ノ上丘陵および右岸の高瀬丘陵を利用して、多数の横穴墓群が築かれるようになる（小野鶴横穴墓群・大曾横穴墓群・高瀬横穴墓群等）。これらの横穴墓群は、植田市遺跡が立地する沖積低地を生産基盤として形成されたものと思われ、特に今回調査した古墳時代流路との関連が注目される。

歴史時代になると、大字宗方・田尻・玉沢・市・木ノ上にかけて条里制が施行され、「植田条里遺跡」という広域遺跡として周知されている。この条里制の施行が、どのくらいまで遡るかが問題となる。植田市遺跡は、この植田条里遺跡の一面に位置しているが、今回の調査では条里に関する顕著な遺構は検出されていない。この他、植田市遺跡の七瀬川対岸には、平安時代後期に比定される高瀬石仏が造営されている。

中世になると、この周辺は「植田荘」という荘園が営まれるようになる。植田荘は上義名・乙犬名・吉藤名・永富名・行弘名・松武名・千歳名・重国名・光吉名・福重名の10名から成り、植田市遺跡周辺は千歳名に属する。今回の調査では一辺が47mを測る方形の堀を持つ居館跡が検出されており、該期の植田荘をめぐる状況との関連が注目される。

以上のように、植田市遺跡は弥生時代・古墳時代・中近世と各時代にわたって遺構・遺物が認められる。今後周辺の遺跡群との関連の中で調査を進め、更に理解を深めてゆきたい。



Fig. 1 穂田市遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 亀甲山古墳 | 2. 古宮古墳 | 3. 宮苑遺跡 | 4. 千代丸古墳 | 5. 餅田古墳群 |
| 6. 庄ノ原遺跡 | 7. 蓬萊山古墳 | 8. 田崎古墳群 | 9. 丑殿古墳 | 10. ニヶ城遺跡 |
| 11. 弘法穴古墳 | 12. 永興寺 | 13. 古国府条里跡 | 14. 国府推定地 | 15. 賀来中学遺跡 |
| 16. 穂田条里跡 | 17. 雄城台遺跡 | 18. 下迫古墳 | 19. 世利門古墳 | 20. 穂田市遺跡 |
| 21. 高瀬石仏 | 22. 御陵古墳 | 23. 口戸石仏 | 24. 豊後国分寺 | |

Ⅲ 発掘調査の概要

(1) 調査の概要

植田市遺跡は大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川の左岸に位置する。河川改修が計画されているルートの上側には、現在大字市から大字高瀬へ至る小道があり、この付近に改修後の河川を横断する橋が計画されている。今年度の調査は、この橋梁部分約6,000m²を対象とした。1988年2月現在、約4,000m²の調査をほぼ終了しているが、期間の関係上、2,000m²は次年度に継続して調査を行うこととした。調査区は、前述した小道を挟んで西側をA区、東側をB区と仮称した。なお小字名は、A区が「印鑰」、B区が「園田」である。1987年5月、B区より調査を開始し、重機により現耕作土と現床土を除去したところ、18世紀代に比定される石組み溝（1号溝）を検出した。さらにサブトレンチを設定し、重機と人力を併用して深掘りを行ったところ、一部のトレンチ壁面に砂礫層と細砂層の堆積を認めた。精査の結果、トレンチ壁面の砂質土層中に須恵器が包含されているのを確認し、トレンチ底面付近で2本のクイ列を検出した。このサブトレンチを拡張し、茶褐色の地山と砂質土層の落ちこみ部（即ち、流路の肩部）を確認した後、再び重機によって地山面まで掘り下げを行った。これと並行して遺構検出を行い、中世館に伴う柱穴等も確認できた。

ところが1987年6月中旬、田植えの時期となり、調査区周辺の田圃に水が引かれ始めた。調



Fig. 2 周辺地形図 (1/3000)

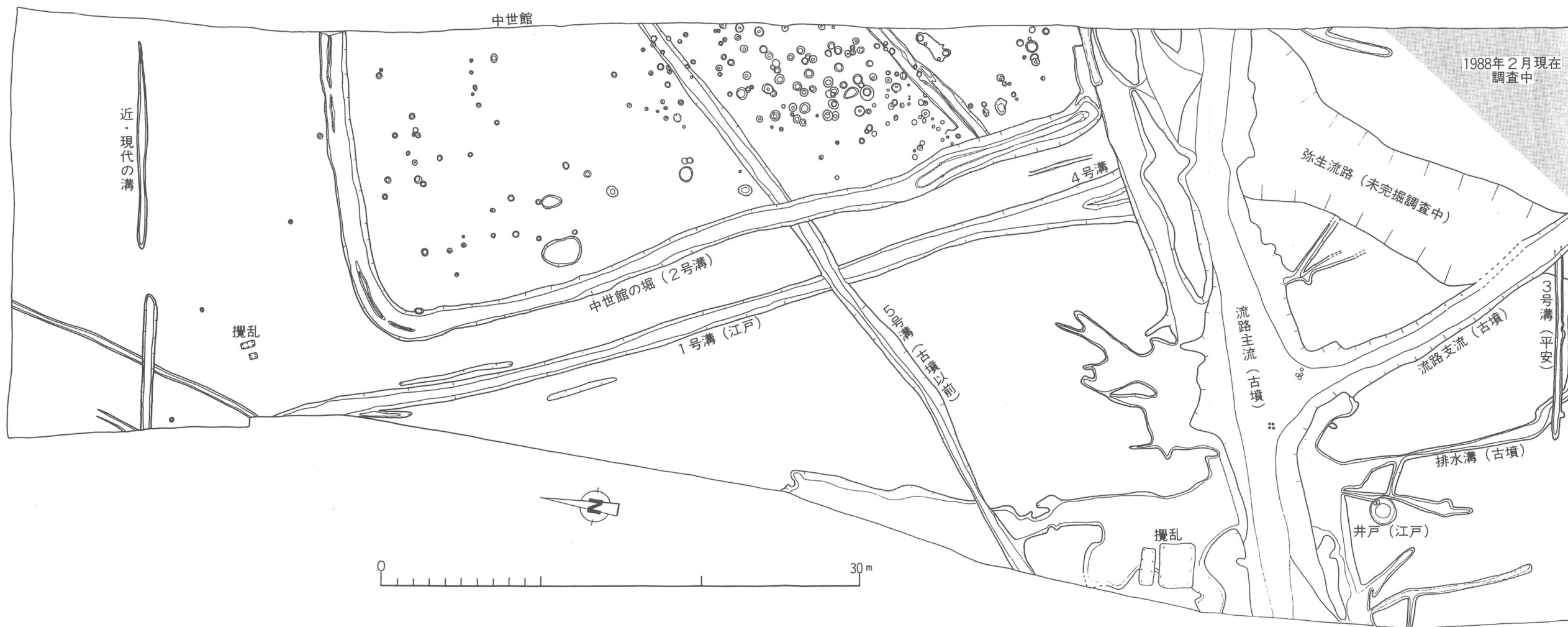


Fig. 3 B区遺構全体図 (最終検出時)

最終検出時の遺構全体図である。地山は南側 (川方) に向かって傾斜している。1号溝 (江戸) は本来石組み溝で、調査区を縦断する形で更に南側に延長して検出されている。

また今回は割愛したが、調査区西側ではマンガン沈着層から掘り込まれた小溝 (中世) が数条検出されている。詳細は本報告に譲りたい。(●はクイ列 ○はクイ穴)

査区に隣接する水路は、長年の使用のため老朽化しており、この水路から漏水し、調査区に水が湧き出した。この予想もしない事態を前に、我々は排水溝を掘る暇もなく、ただ調査区が浸水するのを見守るばかりであった。さらに不幸なことには、その日の夜半から大雨が降り出し、翌日には調査区は完全に水没し



水没した調査区（1987年6月）

た。この日以降、動力式水中ポンプをフル回転で作動させ、調査区の水揚げを行ったが、連日の長雨と大雨に追いつかず、調査はたびたび中断した。この間、調査区内は水没と水揚げを繰り返すことになるが、数日間の晴れ間を狙って、1号溝と中世館内柱穴の掘り下げを強行した。

調査が本格化するのは、田植えの終わる10月中旬以降である。10月下旬に再び遺構検出を行い、B区の中世館の堀が「コ」字状に屈曲することを確認し、この遺構が方形の堀に囲まれた居館跡と想定されるに至った。続いて、古墳時代流路の掘り下げを開始し、B区内の流路をほぼ完掘し終った時点で、重機によってA区の表土はぎを開始した。1988年2月にはA区内の流路もほぼ完掘し、ヘリコプターによる空撮を実施した。その後、B区の弥生時代終末から古墳時代初頭に属する流路とA区に残りの遺構の掘り下げを開始し、現在に至っている。

(2)遺構の概要

調査は現在も継続中であり、今回は掘り下げをほぼ終了しているB区の遺構の概要を紹介する。

江戸時代 石組みの溝（1号溝）一条、井戸一基を検出している。1号溝については後述する。井戸内からは、内野山窯産の磁器等が出土しており、18世紀代に比定される。

中世 一辺47m前後の方形の堀をめぐる館跡が一箇所検出されている。時期は堀・柱穴内の遺物から15世紀後半から16世紀前半頃に比定できる。

平安時代 調査区南辺付近で溝（3号溝）が一条検出されている。後述するが、9世紀代の所産と思われる。

古墳時代 後章で詳述するが、7世紀前半前後に比定される古墳時代流路が検出されている。現在約60mを検出しているが、さらに調査区外に延びることは確実である。

弥生時代 弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての流路を一条検出した。7世紀前半前後の流路と一部重複している。現在、調査続行中である。

その他、調査区北側で近・現代の溝、および遺物が僅少なため詳細な時期を明らかにしえないが、切り合いから古墳時代以前に比定できる断面梯形の溝（5号溝）が検出されている。

(3)江戸時代の遺構、遺物

調査地区内の現耕作土と床土を除去すると、江戸時代の耕作面が現われる。暗褐色系の色調を呈する旧耕作土と明黄褐色系の色調を呈する旧床土の互層が3～4枚認められ、数度にわたって耕作のための整地作業が繰り返されていたことがわかる。時間の関係で精査を断念したが、各層には水田裏作や畑作に関連すると思われる「素掘りの小溝」⁽¹⁾が、縦横に多数認められた。

また、B区では調査区を縦断するように走る石組み溝（1号溝）が検出された。

1号溝（Fig 5） 北西方向に流れる石組み溝である。規模は、長さ90m以上、深さ6.4m前後を測る。掘り方は二段の掘り込みを持ち、掘り方上面の幅は、1.6m前後、底面の幅は0.7m前後である。また石組み内側の幅、つまり実際に水流が認められる部分の幅は0.6m前後を測る。溝の方向は、後述する中世館の西辺の方向を、基本的には踏襲している。加えて調査前の状況を考えると、調査区の現水田の畦畔の一部に1号溝の方向を踏襲するものがあり、注目される。

石組みは、掘り方下段の壁面に沿って頭大の石を一段から4～5段積み重ねた構造となっており、部位によっては控え積みの認められる部分もある。使用されている石材の多くは、七瀬川の河原石を利用したものであるが、一部には石臼の破片や石塔類の台座等も転用されていた。また溝の底面には、クイを穿った跡と思われる直径15cm前後の小ピットが多数認められた。一見、ランダムに穿たれているように見える小ピットも、詳細に観察すれば、千鳥状に穿たれているクイの配列を読み取ることができる部分がある。これは、石組み内壁と平行に、横木あるいは板状の木材を配置したものを固定する役割を果たしたものと思われる。（Fig 4）

埋土は、数層に分離できる砂質土層によって構成されており、水流のあったことを示している。埋土中には多数の陶磁器片・土器片

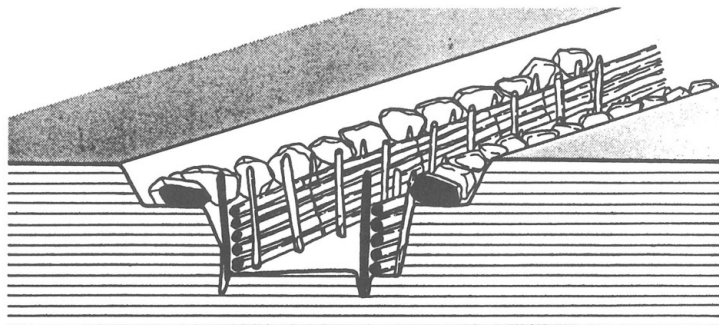


Fig. 4 1号溝復元想定図

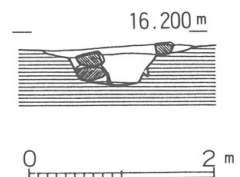
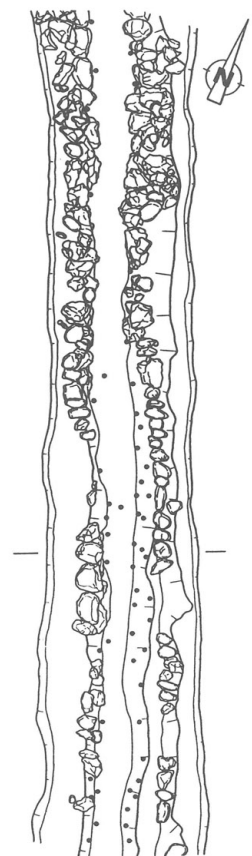


Fig. 5 1号溝実測図（部分）

のほか、鶏形土製品・銅銭・銅製品（煙管・筭等）・鉄製品等が認められた。

1号溝出土遺物（Fig 6） 1～6は肥前系の陶磁器である。1は磁器碗で見込みは蛇の目釉ハギとなる。2は陶胎染付碗で、体部外面には草花文を描く。3も磁器碗で、体部外面下半から外底にかけて露胎となる。見込みは、蛇の目釉ハギとなる。4は体部外面に竹林をモチーフとした文様を描く。5は深紫色の釉を持つ小碗である。6は外面に草花文を描くぐい呑みで、約2分の1を欠損する。7は京焼風の碗で、淡黄褐色の釉を基調とし、体部外面には緑釉の釉だれが見られる。1号溝から出土した陶磁器類は、おおむね18世紀代の特徴をもつ。⁽²⁾ 8～10は銅銭である。8は北宋銭の元豊通宝で、初鑄年代は1078年である。9・10



1号溝細部

は寛永通宝で、字体の特徴から、9が「古寛永」、10が「新寛永」と通称されているものに相当する。

注(1) 今尾文昭『『中世』素掘り小溝についての一解釈』（『青陵』47 1981年）

中井一夫「いわゆる中世素掘溝について」（『青陵』47 1981年）

八尾博之「中近世素掘り小溝について」（『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986年）

(2) 陶磁器については、大橋康二氏（九州陶磁文化館）の教示を得たほか、下記文献を参照した。

九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』（1984年）

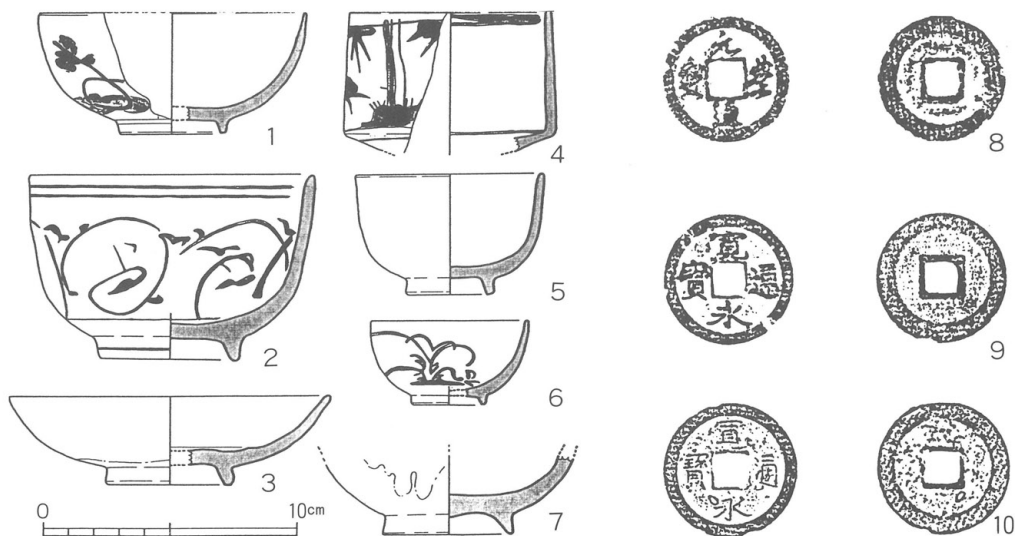


Fig. 6 1号溝出土遺物

(3) 中世の遺構・遺物

江戸時代に比定される数枚の耕作面を除去すると、マンガン沈着層が現われる。基本的には、中世の遺構はこの層の上面から、古墳時代の遺構は下面から掘り込まれている。しかし、このマンガン沈着層はごく薄く、場所によっては消失する部分もあり、両者が同一遺構面で検出されることも多い。

B区内における中世の遺構は、方形の堀を有する館跡一箇所を検出したほか、古墳時代流路上面より碁笥底を呈する中国産染付をはじめ、若干の遺物を採集している。

中世館跡 方形の堀（2号溝）に囲まれた居館跡である（Fig. 7）。堀の規模は、西辺47m、北辺17m以上を測り、上面の幅は約2mである。深さは約0.6mであるが、堀の西辺の途中から南西コーナーにかけて約1.2mと深くなる。堀の深さが変化する部分の底面には、一對の小ピットが認められ、何らかの施設が存在が考えられる。また、北西コーナーから北辺の一部には、底面に隔壁が認められる。南辺には、幅1.4m、長さ2.5mの張り出しと幅0.8mを測る小溝がみられ、「出入口」に相当する施設と思われる。堀の埋土中には、陶磁器類や銅銭等、多量の遺物が含まれており、15世紀後半から16世紀前半のものが主体となる。

堀に囲まれた空間内には、多数の柱穴のほか、墓2基および小形の井戸（水溜め）と思われる土坑1基が検出された。

柱穴は館内部の南側に密集し、北側では疎散的となる。現状でも数棟の掘立柱建物と柵列が想定されるが、東側が未調査であり、建物群の最終的な検討は、全掘後に行うこととしたい。一部の柱穴の埋土中からは、中国産染付、中世土師器、古銭等が検出されている。

墓は2基検出されている。1号墓は素掘りの土壇墓で、長さ0.9m、幅0.6mを測り、堀の西辺の中央付近に位置する。内部からは獣骨が出土しており、獣禽類の墓と思われる。2号墓は二枚の石蓋を有する土壇墓で、長さ1m、幅0.6mを測り、柱穴密集部分に位置する。墓壇掘り方の北側部分から、数本の歯が検出されていることや墓壇の大きさから、小児墓であろうと思われる。なお両者とも、骨に関する専門的な鑑定を受けていないことや、出土遺物が僅少であることなど、現状では確実に館に伴うものか否かの判断が難しい。本報告で検討することとしたい。

井戸は直径0.8m前後の小形のもので、上面に石組みを有するものと思われる。館の南西隅付近で検出した。埋土中より、細蓮弁文青磁碗等が出土している。

また、堀の北辺近くのピットから、土師器坏7枚、皿10枚を一括埋置した遺構が発見された（Fig. 8）。ピットの規模は、直径31cm、深さ12cmの小形のもので、底面よりやや上位のレベルで土師器が折り重なるようにして出土している。土師皿は口径7cm前後、器高2cm前後を測り、口縁が直線的に立ち上がる器形となる。坏は口径12cm前後、器高3cm前後を測る。口縁部が内湾気味に開き、底部付近を強くヨコナデする（Fig. 9）。現在検討中で、この土器群の詳細な年代を決定しえないが、出土位置よりみて「地鎮」等の館内建物の安寧に関する呪術的な

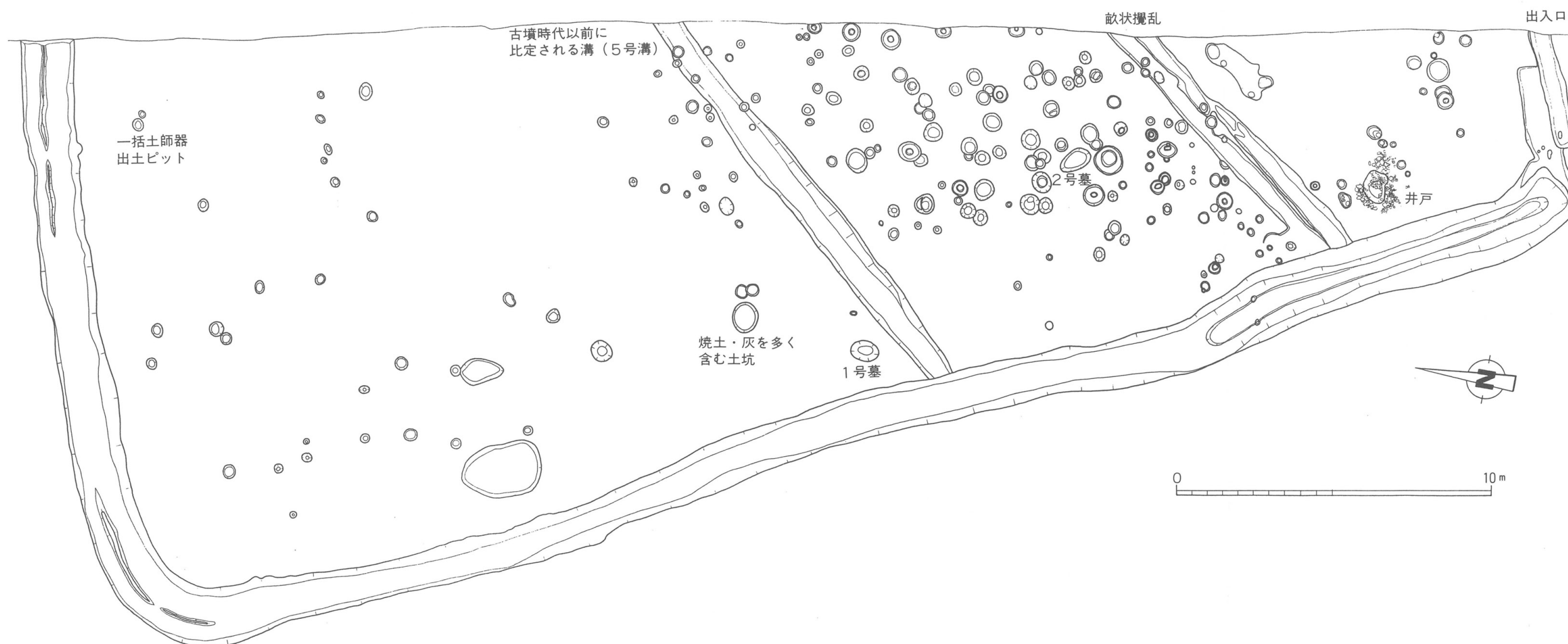


Fig. 7 中世館全体図 (1/150)

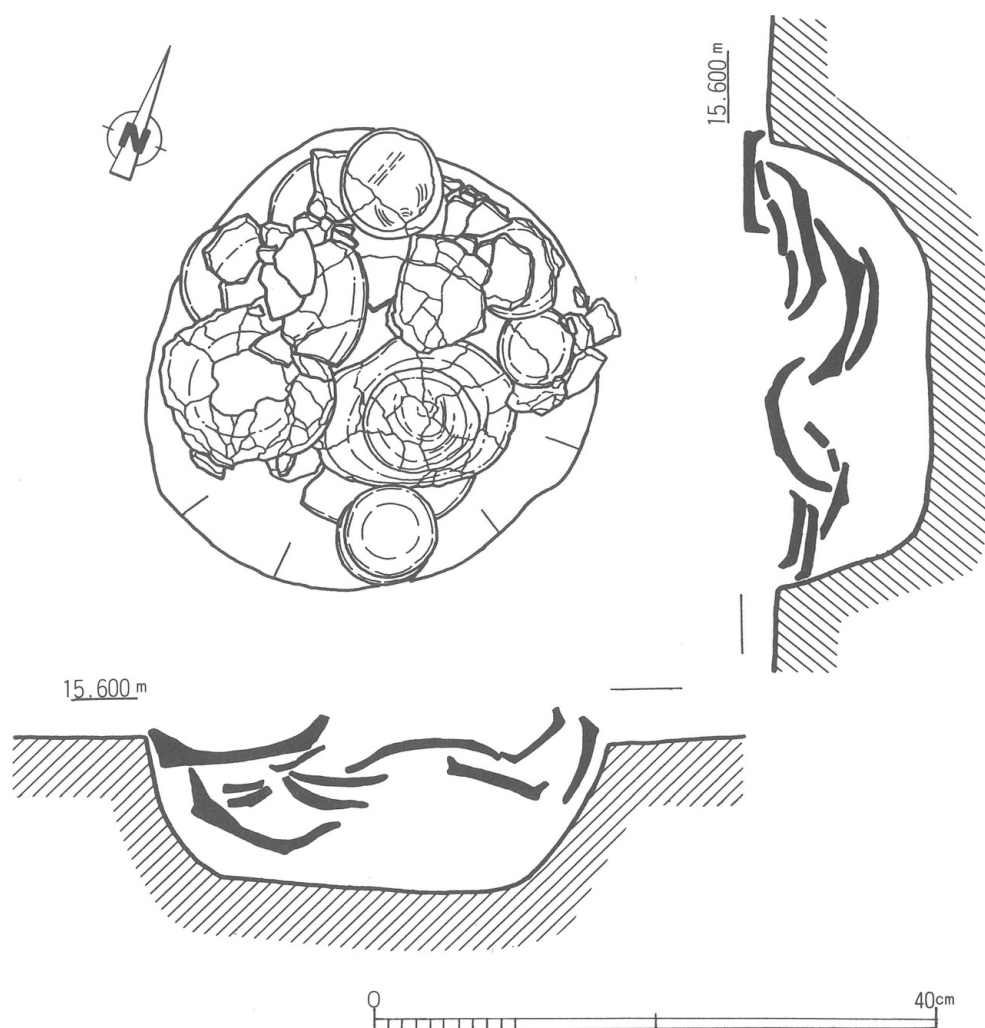


Fig. 8 一括土師器出土状況(1/5)

遺構とみられることから、一応館の存続幅の中での年代を考慮しておきたい。

中世館周辺の出土遺物 (Fig. 10) 1～9は堀の埋土中からの出土である。1・2は備前系の播鉢、3・4は備前系の甕の口縁部でいずれも16世紀代に比定される。間壁忠彦・間壁菫子⁽¹⁾氏によるⅣ期に属するものであ



一括土師器出土状況

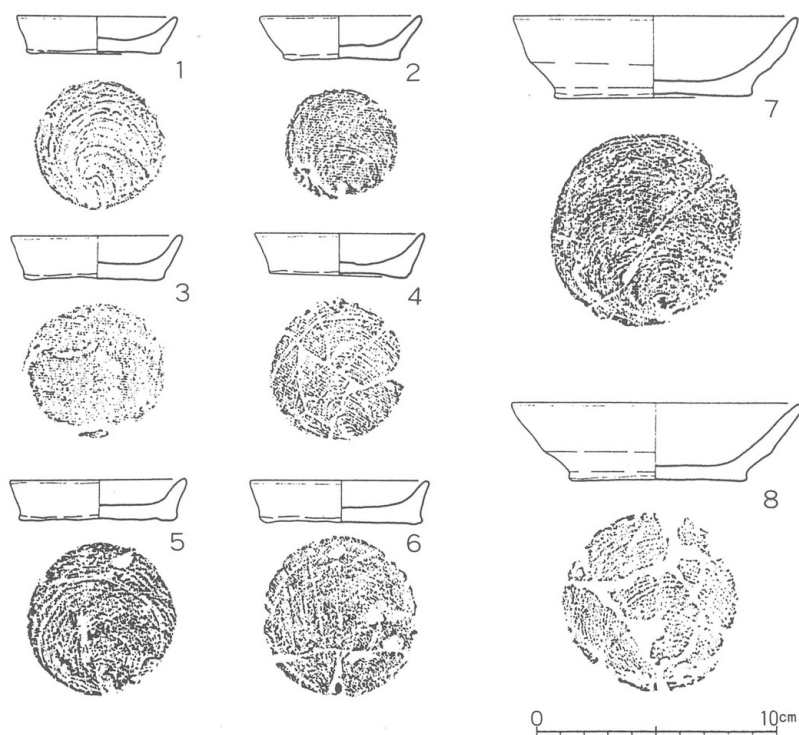


Fig. 9 土師器実測図（一部）

る。5は東海地方産(?)の甕の胴部で、12~13世紀に比定されるものである。外面には二条を一単位とする原体で、波状文と直線文が描かれている。⁽²⁾6・7は中国産の青磁である。6は雷文帯青磁碗と呼ばれるもので、口縁部外面に雷文、胴部内外面に花文を有するタイプである。14世紀後半から15世紀前半に比定される。7は細蓮弁文青磁碗と呼ばれるもので、15世紀後半から16世紀前半前後に比定される。8は中国産の白磁皿で、口縁が端返りとなるタイプのものである。⁽³⁾15~16世紀に比定されよう。9は朝鮮産(李朝)の白磁碗で、内底に4箇所の胎土目積みが見られる。16世紀代に比定される。10は中国産染付で、館内部の畝状攪乱部底面より出土している。小片ではあるが皿の底部と思われ、見込みに人物像を描き、外底に洪武年号の記銘が見られる。⁽⁴⁾小野正敏氏分類のE群に属し、16世紀後半から末に比定される。11は柱穴内部から出土した中国産染付皿で、小野氏分類のB₁群(皿Ⅳ類)に属し、15世紀後半から16世紀前半に比定できる。12は古墳時代流路上面から出土した碁筍底タイプの中国産染付皿で、やはり15世紀後半から16世紀前半の年代である。見込み部分には「寿」の字が脱化された記号を描いている。13は中国産の細蓮弁文青磁碗底部で、見込み部文に花文を描く。館内井戸の埋土中より出土したもので、16世紀前半を下らない年代が考えられる。

以上のように、中世館周辺の出土遺物には古い様相を示すものが若干混入している(5.6)ものの、おおむね15世紀後半から16世紀代のものが主体を占める。これらの遺物は館の存続年代

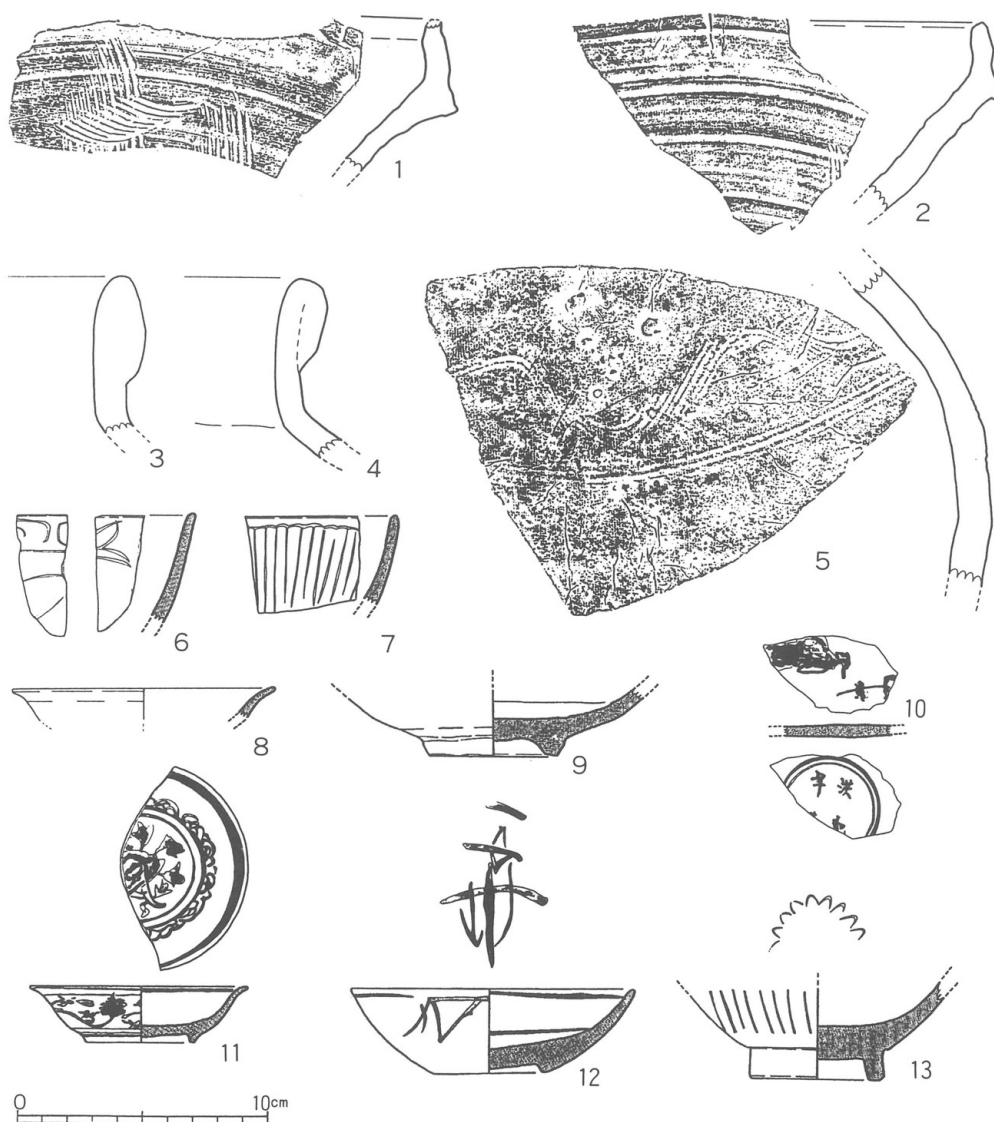


Fig. 10 中世館周辺出土遺物 (1/3)

を暗示するものといえよう。なお館内北側には、東西方向に伸びる畝状の攪乱がみられ、その底面から16世紀後半から末前後の染付片(10)が検出されている。出土状況からみて、この遺物は館の廃絶年代を示唆するものといえよう。⁽⁵⁾(Fig. 11参照)

注(1) 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート(3)」(『倉敷考古館研究集報』5 1968年)

(2) 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」(『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念 1980年)

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)等を参照とした。

(3) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)

(4) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)

(5) 陶磁器については大橋康二氏の御教示を得た。

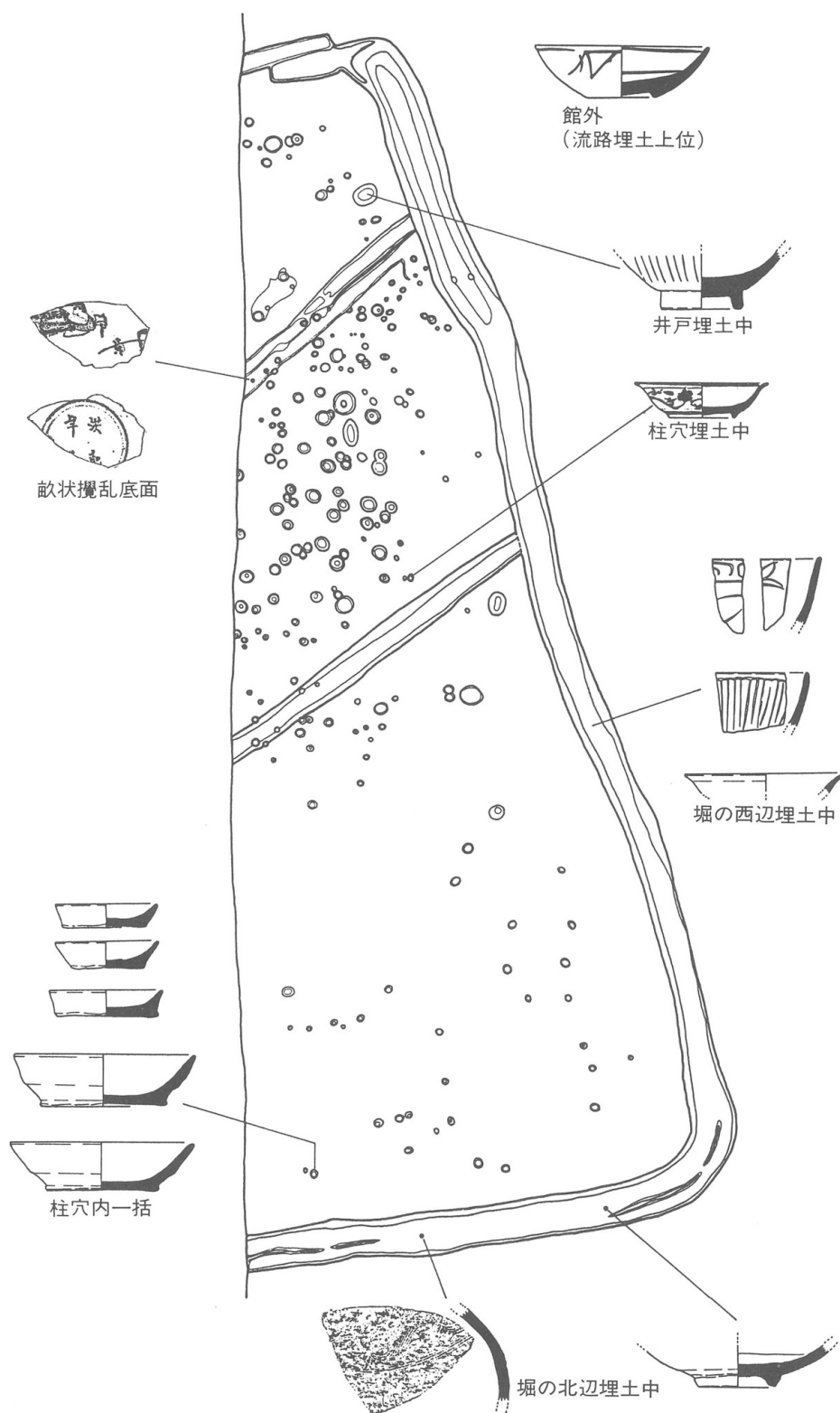


Fig. 11 中世館周辺の遺物の出土位置

(4)平安時代の遺構・遺物

平安時代の遺構は、B区で溝（3号溝）一条を検出した。このほかA区において、古墳時代流路上面から若干の遺物を検出しているが、今回は割愛する。

3号溝（Fig13） 調査区南辺付近に於いて、東西方向に延びる平安時代の溝を検出した。上面は、中世および江戸時代の整地によってかなりの削平を受けており、さらに東側を江戸時代の石組み溝（1号溝）から切断されている。本来の規模は不明であるが、残存長11.4m以上、幅0.28~0.68m、深さ0.1~0.13mを測る。埋土は黄褐色砂質土であり、溝底のレベルよりみて、東側へ向かって水が流れていた可能性がある。また、南側にはコブ状の張り出しが数カ所認められるが、これらが「水口」の役割を果たしたかどうかは不明である。

後述するが、3号溝の検出位置は植田条里の東西線が推定されるラインより、ほぼ1町（108~109m）の位置に当たる。遺構の残存状況が不良であることから、今回3号溝を直接条里区画と関連する遺構と判定することは、保留しておきたい。

遺物は、溝埋土上面から完存品の土師器皿と、三片に割れた黑色土器杯の半欠品が出土したほか、埋土中より古墳時代の須恵器・土師器の小片が多数認められた。

3号溝出土遺物（Fig12） 1は土師器の皿で、口径14.0cm、器高1.7cmを測る。口縁部が外反する器形を呈し、内底付近は不整ナデ、口縁部から胴部にかけては回転ナデを施し、底部はヘラ切り離しのままである。色調は淡褐色を呈し、胎土には石英・角閃石等を含む。焼成は良好である。2は黑色土器の杯で、復元口径14.0cm、器高4.7cmを測る。内面と口唇部外面約半周に炭素を吸着させて黒色とする。口縁部がやや外反する器形を持ち、底部は左回りの回転ヘラ削りを施す。色調は淡橙色を呈し、胎土には石英・角閃石等を含む。焼成は良好である。

1・2は、いずれも9世紀代に比定されよう。

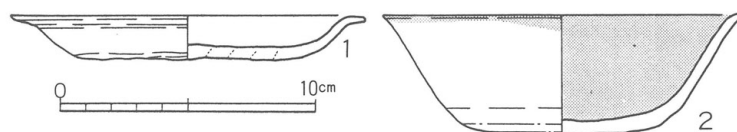


Fig. 12 3号溝出土遺物（1／3）

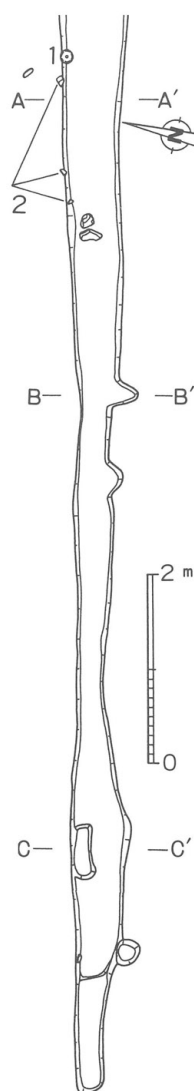


Fig. 13 3号溝実測図

(5)古墳時代の遺構・遺物

流路 調査区を東西方向に横断する旧河道を利用した流路である。流路底面レベルと現在の七瀬川の流れから、東側へ向かう水流を持つものと思われる。流路上面の幅は0.4~0.8m、底面の幅は0.3~0.6m、深さ0.8~1.2mを測る。古墳時代の流路は、①旧河道を利用し、絶えず水流が認められていたと思われる「流路主流」、②クイ列によって水流を調節し、滞水する時期があったと思われる「流路支流」、③流路主流に接続し、主に排水の役割を果たしたと思われる「排水溝」という、性格の異なる三種類の溝から構成されている。

「流路主流」は断面不整形台形を呈し、埋土は一部にシルト層と細砂層の互層を形成するものの、基本的には底面まで砂質土層で形成される。「流路支流」は断面V字状を呈し、埋土は下位に粘質土、上位に砂質土が堆積する。下位の粘質土は、クイ列によって水流を調節し、滞水する時期に堆積したものと思われる。「排水溝」は断面U字形を呈し、暗褐色砂質土によって堆積されている。底面のレベルは流路主流の方に傾斜している。



流路全景（西から）



流路全景（北から）



排水溝

注目すべきことは、排水溝がコの字状・L字状に屈曲する部分が見られることで、耕作面の区画を示唆するものであろう。

それぞれの溝の埋土中には、多量の遺物が含まれており、時期は7世紀前半前後に比定される。遺物の出土状況、土層図の提示等、詳細は本報告に譲りたい。

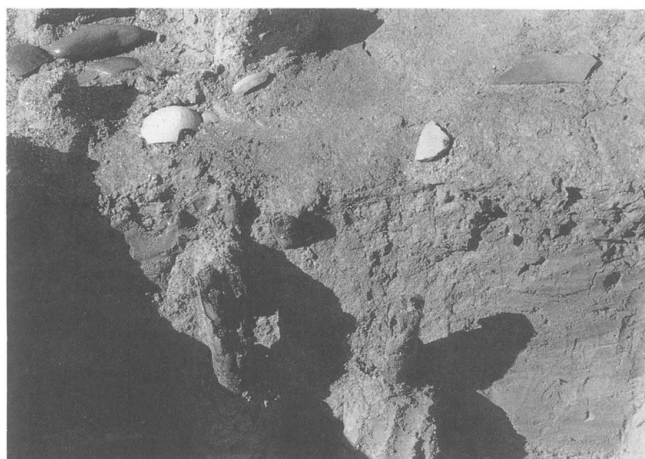
クイ列の状況 流路支流入口に付設されたクイ列である。本調査に入る以前に設定したサブトレンチによる深掘りで、主要部分を破壊してしまったのが惜しまれるが、残存する4本のクイ列を検出できた。クイは、残存長50cm前後の大形のもの⁽¹⁾と30cm前後の小形のもので構成され、鉄器による加工痕が認められる。クイ列付近の流路主流底面のレヴェルは流路支流へ向かって傾斜しており、この部分に水を溜め、クイ列で水量を調節し、流路支流に流す構造となっている。

注(1) クイに見られる加工痕については、以下の文献を参照した。

中島直幸「杭・矢板の加工痕について」(『菜畑』唐津市 1982年) PP. 522～528



クイ列検出状況



クイ列全景



クイ列細部

流路出土土器 (Fig14) 古墳時代流路の埋土中からは、多量の土器が出土した。今回は須恵器10点 (1～10)、土師器6点 (11～16) を紹介する。1～6は須恵器坏身である。1は復元口径10.5cm、器高4cm前後を測る。中村浩氏による陶器編年のI型式3段階前後に比定される。⁽¹⁾ 2は口径10.3cm、器高5.1cm、3は口径10.6cm、器高5.2cmを測る。いずれもI型式4～5段階に比定されよう。4～6は口径10.8cm前後、器高3.5～4cm前後を測り、底部はヘラ切り後、ナデを施す。II型式5段階に比定され、7世紀前半前後の年代を示す。⁽²⁾ 7・8は甕で、7は口縁部を、8は頸部を意図的に打ち欠いている。7の頸部は太く短く、古式の特徴を示し、I型式の範疇で理解される。9は高坏脚部で、三方に円形透しを有する。10は櫛描き波状文を有する甕の口縁部で、口縁外面に二条の突帯を有する。いずれもI型式に属するものであろう。11は土師器の小型丸底壺、12は高坏坏部で、いずれも5世紀中葉から後半の特徴を示す。13・14は土師器鉢である。14は内面上位をヘラ削りしている。15・16は土師器坏であり、底部外面に「X」状のヘラ記号を有するものである。両者は、流路東側の近接した位置から検出されている。

以上のように、流路出土土器には、5世紀代に比定されるもの (1～3・7・9～12) と7世紀前半前後に比定されるもの (4～6・13～16) が認められる。詳細は本報告に譲るが、流路出土土器には、40m以上離れて接合するものや流路上面と底面で接合するものがあり、出土土器の大半は流れ込みによるものである。このうち、5はクイ列付近の底面で検出されており、⁽³⁾ 流路の形成年代を示唆するものと思われる。

水に対する祭祀 流路埋土中には、多数のミニチュア土器・紡垂車等、「水」に対する祭祀遺物が検出されている (Fig15)。既述した土器の出土状態より、すべてが原位置を保っているとは言い難いが、これらの遺物はクイ列周辺および流路主流・流路支流に多く検出される傾向にある。1～18はミニチュア土器である。ミニチュア土器には、口径3～4cm前後、器高2～3.5cm前後を測る小形のもの (1～12) と口径4.5～7cm前後、器高4～5cm前後を測る大形のものがあり、さらに大形のものは、頸部を形成せずに口縁部と続くもの (13・14) と頸部のくびれを形成し、口縁部に至るもの (15～17) に細別される。18は器台形を呈するミニチュア土器である。19～21は石製の紡垂車である。専門家による判定を受けていないが、石材は緑泥片岩を利用したものと思われる。紡垂車の直径は3.5～4cm前後、厚みは1～1.4cm前後とバラエティーがあるが、これを時期差とする積極的な根拠はない。紡垂車の表面には、いずれも工具による加工痕が認められる。19はB区流路から、20はA区流路から、21はB区排水溝から出土したものである。

注(1) 中村浩『和泉陶器の研究』(1981年)

(2) 該期の須恵器の実年代に関しては、以下の文献に依ることとする。

村上久和・吉田寛・宮本工「豊前における初期瓦の一樣相」(『古文化談叢』18 1987年)

(3) 流路底面付近からは、7世紀前半前後の土器が出土する。5世紀代の土器は、流路上面ないしは埋土中に包含されているものが多い。

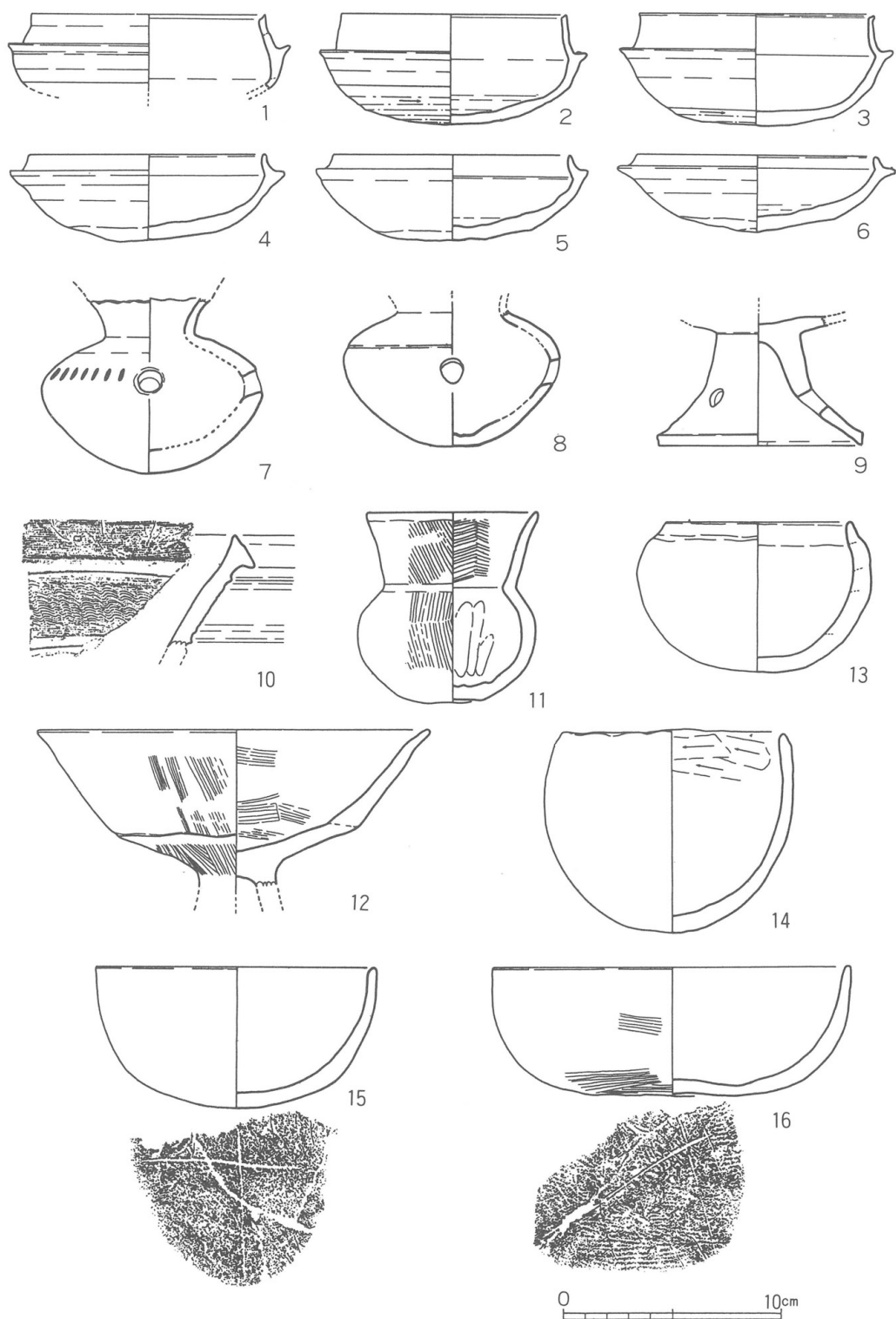


Fig. 14 流路出土土器 (1 / 3)

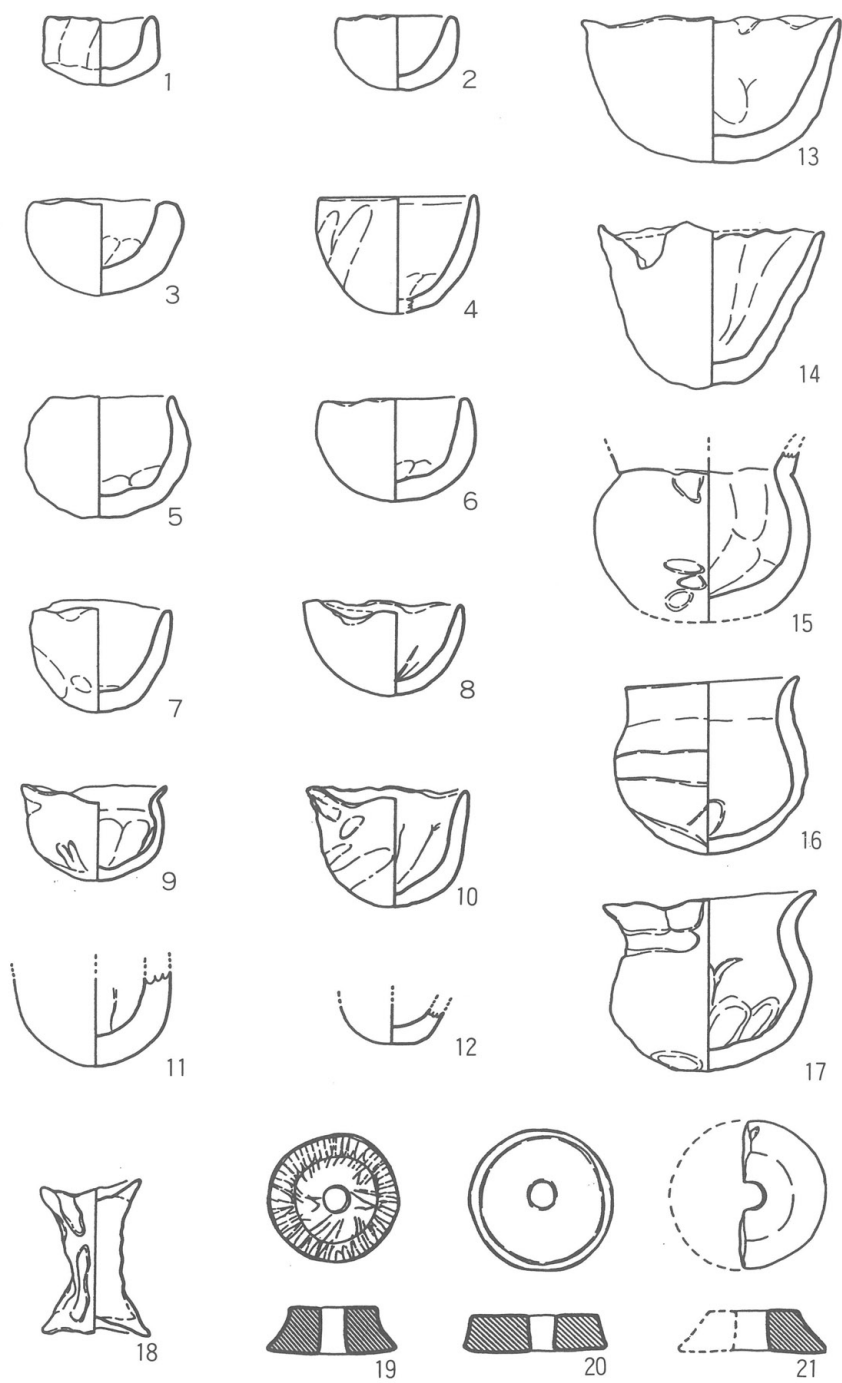


Fig. 15 ミニチュア土器・紡垂車実測図 (1 / 2)

(6) 弥生時代の遺構・遺物

B区南東側において、弥生時代の小河川跡と思われる流路を検出した。河川跡とすれば、現在の七瀬川の流れから推定して、北東方向の水流を持つものと思われる。1988年2月現在、調査続行中であり、詳細はいまだ不明である。流路上面の幅は6m前後であり、東側で古墳時代の流路と重複している。

流路埋土中には、多数の土器片が包含されている。時期判定の基準となり得るものはほぼ完形に復元できる壺・甕・高坏等があり、土器の特徴から、豊後地域編年のV期⁽¹⁾(弥生時代後期末から古墳時代初頭)に位置づけられる。周辺の雄城台遺跡との関連が考えられるが、今後の調査に期したい。

注(1) 高橋徹「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」(『古文化談叢』第5集 1979年)

羽田野光洋「二本木・松木遺跡を中心とした出土土器の編年(案)」(『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980年)

(2) 高橋信武『雄城台遺跡』(大分県教育委員会 1987年)



流路全景(西から)



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

Ⅳ まとめと今後の課題

調査は現在も続行中であるが、今回の調査を通じて考えたことを思いつくままに綴り、まとめとしたい。

植田条里について 大分平野に残る条里遺構は、⁽¹⁾①古国府から荏隈にかけての一带、②旧植田村の宗方・玉沢・市等の七瀬川左岸地域、③同右岸田尻の旧東植田村役場付近、④賀来川右岸の旧賀来村と旧由布川村境界一带、⑤上野台地北側の大道付近の5群の分布がみられる。このうち②は「植田条里」と通称されるもので、植田市遺跡がこの条里遺構の分布する一面に所在することは既に指摘した。本書に掲載した植田市遺跡の周辺地形図（Fig. 2）と植田条里分布図（Fig. 16）を見比べると、植田条里の南北線は大字市から高瀬へ至る道、つまりA区とB区を区切る道に相当する。現在A区の遺構検出をほぼ終了した段階で、道の真下を未調査であるが、現状では溝・畦畔等の区画を示す遺構は検出されていない。東西線は大字市から玉沢へ至る道に相当する。東西線が想定されるラインは、今回の調査区からははずれている。しかし注目されるのは9世紀代に比定される3号溝である。3号溝は上面を大きく削平され、残存状況は良好ではないが、前述の東西線よりほぼ1町（108～109m）の位置に対応する。将来の調査でこの溝の延長部と正確な位置が確認されれば、植田条里の起源と関連する遺構となることも考えられる。⁽²⁾

また、今回検出された中世館の堀（2号溝）を大縮尺の地図に投影してみると、興味深い知見が得られる（Fig. 2 参照）。前述の通り、18世紀代に比定される石組みの1号溝は、館の堀の西辺を踏襲して造営されており、1号溝の上位に存在する現水田の畦畔は、明らかに1号溝を基本として造営されている。また「出入口」施設を持つ堀の南辺を踏襲して作られたと思われる畦畔も存在する。つまり、現水田の一部の畦畔は中世館の堀を基本としており、その起源は館の造営時期である15世紀後半を遡るものではない。これらの畦畔の方向は、条里区画の方位と約30度ふれており、条里区画との関連は考えられない。以上より、今回の調査では明瞭な条里区画の遺構を検出できなかったことや、現水田にみられる畦畔はむしろ中世館の堀を踏襲したもので、条里的区画とは無関係のものであることが判明した。前述した3号溝の評価とからめて、植田条里の詳細については今後の調査を待ちたい。

中世館について 堀・柱穴・井戸等の埋土より検出された遺物より、中世館の造営年代は15世紀後半から16世紀前半を主体とすることが判明した。館の北側には畝状の攪乱が認められ、この底面より検出された陶磁器破片から、16世紀末前後には館が廃絶されていた可能性が大きい。考古学的に得られた年代観を正当なものと仮定して、以下の記述を進めたい。

さて、植田市遺跡が所在する場所周辺は、当時上義名以下10名からなる「植田荘」とよばれる荘園であった。植田荘の大部分は、豊後大神氏の一族植田氏によって支配されていた。

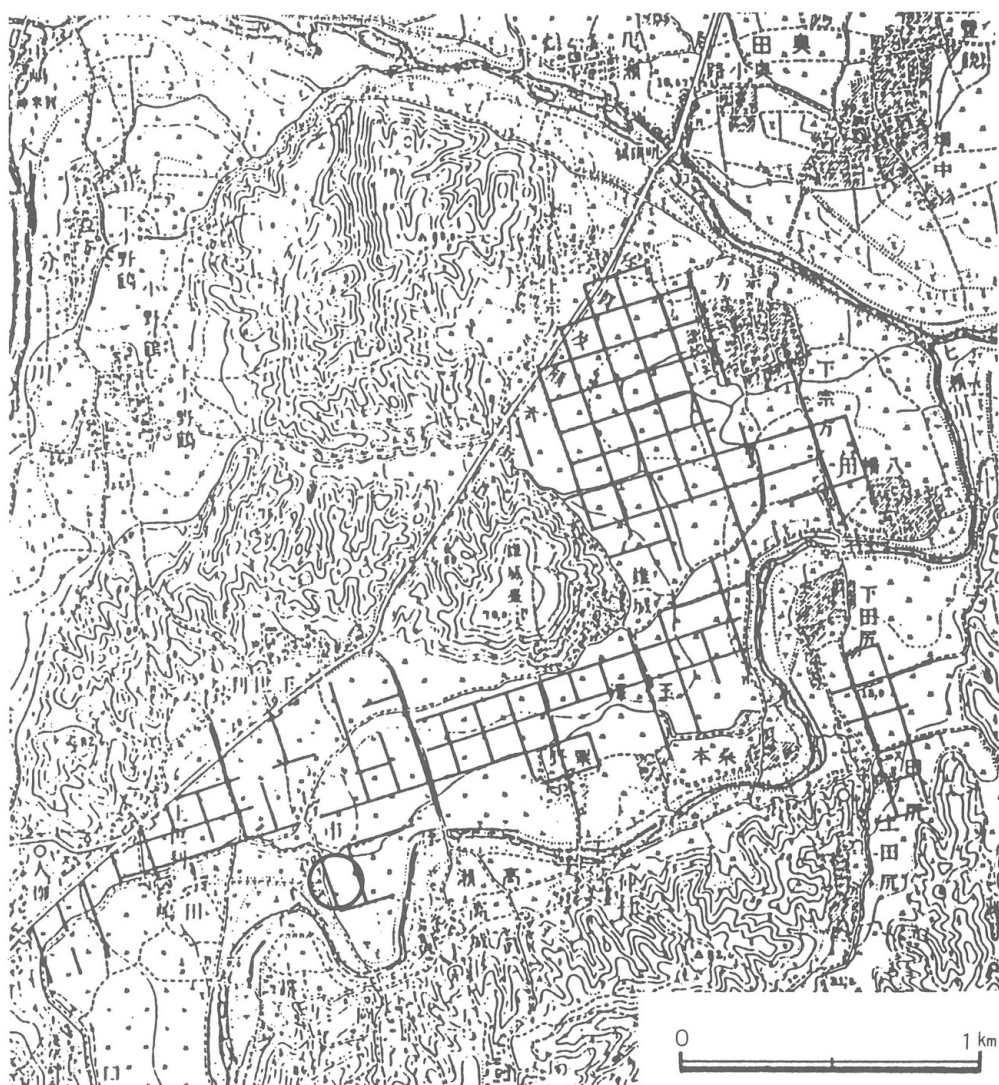


Fig.16 植田条里図 (注①)出田論文より ○は調査区)

当遺跡の位置する地点は、佐藤満洋氏の復元案によると、豊後国⁽³⁾植田^{せんざい}荘千歳名に含まれる。弘安8年(1285)に成立した『豊後国図田帳』によれば、植田荘千歳名の地頭は相模国御家人川村新五郎清秀で、植田一族とは無関係の者であった。川村氏は大友氏の家臣という伝えがあるが、詳細は明らかでないという。その後の千歳名における地頭の変遷については記録がなく、不明である。

今回の調査で検出された館の考古学的年代は、15世紀後半から16世紀前半代である⁽⁴⁾。この頃になると、大友氏の戦国大名化に伴い、植田荘内における植田氏の地位は極端に矮小化されてゆく。まず、永正13年(1516)大友親安(義鑑)は原尻十郎に植田荘吉藤名内居敷三貫分を預け、続いて植田荘内所領七貫分が賀来荘地頭賀来氏に、三貫分が朽綱氏に与えられる。また天

文元年（1532年）の豊前国妙見岳城の戦いで、植田惟満は戦死、その恩賞は領内安堵ではなく、筑前国内の4町分が宛られたのである。さらに、大神系図によると元亀年間（1570年）以前には、植田本宗21代惟久の時「田原紹忍の非を訴え所領を没収され、のち（中略）筑後に住するに至った」とされ、植田一族は壊滅的なダメージを受ける。

植田荘千歳名内で発見された中世館は、前述の通り植田氏と直接の関連を有するかどうかは明らかでない。しかし、館の廃絶年代は植田氏の衰退年代と一致する部分が多い。今後さらに検討を重ねたいが、植田市遺跡で検出された館跡は、植田荘内における植田氏の盛衰とおそらく軌を一にするものであろうことを指摘しておきたい。

古墳時代流路について 調査区南側において7世紀前半前後に比定される古墳時代流路を検出した。A・B区内で検出された流路は長さ60m以上を測り、調査区外にのびる。西側では現在の七瀬川に接近しており、さらに調査が進めば、当時の河川との接続点を検出できると考える。

古墳時代流路が、絶えず水流の認められた「流路主流」、クイ列によって水流を調節し、滞水する時期のあった「流路支流」、排水の役割を果たし、流路主流に接続する「排水溝」の3つの溝で成り立っていることを既に指摘した。注目すべきことは、排水溝がL字状ないしコの字状に屈曲することで、この付近に耕作面が想定される。遺構の状況から、この耕作面はおそらく水田址と思われ、流路のあり方より、排水を主眼とした水田が想定されよう。後世の削平が著しく、畦畔等の明確な痕跡を検出できなかった。今後の調査に期したい。

以上の記述をもって、今回はまとめと代えたい。今後は、今年度実施できなかった花粉分析などの自然科学的な調査や字名の悉皆調査等、総合的な調査を実施していきたい。

注(1) 大分平野周辺の条里遺構については、以下の論文を参照した。

兼子俊一「大分県下の条里遺構」(『大分県地方史』第4号 1955年)

出田和久「大分川下流平野の歴史地理研究序説」(『大分川流域』1986年)

西別府元日「班田農民のくらし」(『大分市史』上巻 1987年)

- (2) 条里遺跡について、現在最も良好な考古学的調査が行われているのは山口県下関市延行条里遺跡である。ここでは10世紀代に条里制に関する区画が発現し、12世紀前後と14・15世紀、および17世紀に区画の再編を経て、現景観へと至っている。また全国的にみても、現景観の条里遺構が考古学的に遡れるのは、13世紀前後を主体とするという。植田市遺跡における3号溝は残存状況が不良であることや遺構が9世紀代に遡ることなどから、現状で直接、条里制に関わる遺構と断定するのは留保しておきたい。なお条里制に関しては、以下の著作を参照した。

水嶋稔夫編『綾羅木川流域の条里遺構』I・II（下関市教育委員会 1983・1984年）

水嶋稔夫「山口県下関市延行条里遺跡の調査」(『古文化研究会会報』No52 1985年)

奈良国立文化財研究所『条里制の諸問題』I～III（1982～1984年）

- (3) 佐藤満洋「天正末期の豊後国植田荘について—植田荘名々給人注文写の研究—」(『大分県地方史』第88号 1978年)
- (4) 以下の記述は、渡辺澄夫「豊後国大分郡勝津留・津守荘・勾別府・植田荘」(『大分県地方史』第23号 1960年)による。

植田市遺跡 I

七瀬川河川改修工事に
伴う発掘調査概報

1988. 3. 31

大分県教育委員会
印刷 東洋印刷

埋蔵文化財センター

1. 5. 30

